

児童・生徒理解を援助する測定と評価

学校教育専修 大井修三

研究内容（紹介文）：社会の価値観、生活観が多様になるに伴い、生徒・児童を含む他者理解が難しくなっています。それは、“私（自分）”が持つ他者理解のための枠組みでは対応しきれなくなっていることを示しています。そこで、その対応しきれなくなっている部分を補うための援助を考えようということが本研修の目的です。そのためには、相手が出す情報を処理するためのいささかの技能が必要です。目的にあわせてどのように情報を収集し、どのように処理すれば効果的な援助手段になるのかを考えます。

本講座は、上述の内容で研修生を募りました。開講当初のねらいは、研究生が身近に抱えていて、具体的にどのように取り扱えばよいかで行き詰まりになっている課題を、どう取り扱えばよいかのヒントを与えることでした。このような状態に陥る多くの原因は、目の前にあって問題だと感じている事態を、主観的にしか見えていないことにあります。そこで、研修生が日常課題と思っていることを客観的に把握する視点と方法を学ぶことを目的にしました。そのために、各自の話題に沿って子供の心を測定するための尺度を構成することが目的で、以下のような研修スケジュールを考えていました。

第1回：各自が持ち寄る課題の紹介と研修の進め方

ミニ講義「“他者の心”を理解するとは：理解するには」

第2回～第4回：各研修生の現場に戻って、行動と環境の情報を収集し、適宜指導者と連絡を取りながら質問紙に仕上げていく。また新学期が始まってから、質問紙調査を実施して結果を分析し、結果を指導者と議論する。

第5回：各自の作成した質問紙の内容・結果・結論を発表し、研修生間で議論する。研修生全員の成果を、研修全員で共有する。

このような予定で、大学研修の第1回を迎えました。

第1回の研修内容：

研修前に研修生には、日常の理解に困っている教育実践の場における課題を収集してくることをお願いしてありました。第1回では、まず各自の自己紹介と、日ごろ感じている課題の紹介をお願いしました。そうすると、予想に反して研修生全員が事例に関する課題を紹介してくれました。これにはかなり戸惑いました。ですが、全員の了解で急遽研修内容を変更することにしました。各自が持ち寄った事例を材料に、各自の取り組みを検討して、それらの事例の客観的理解を

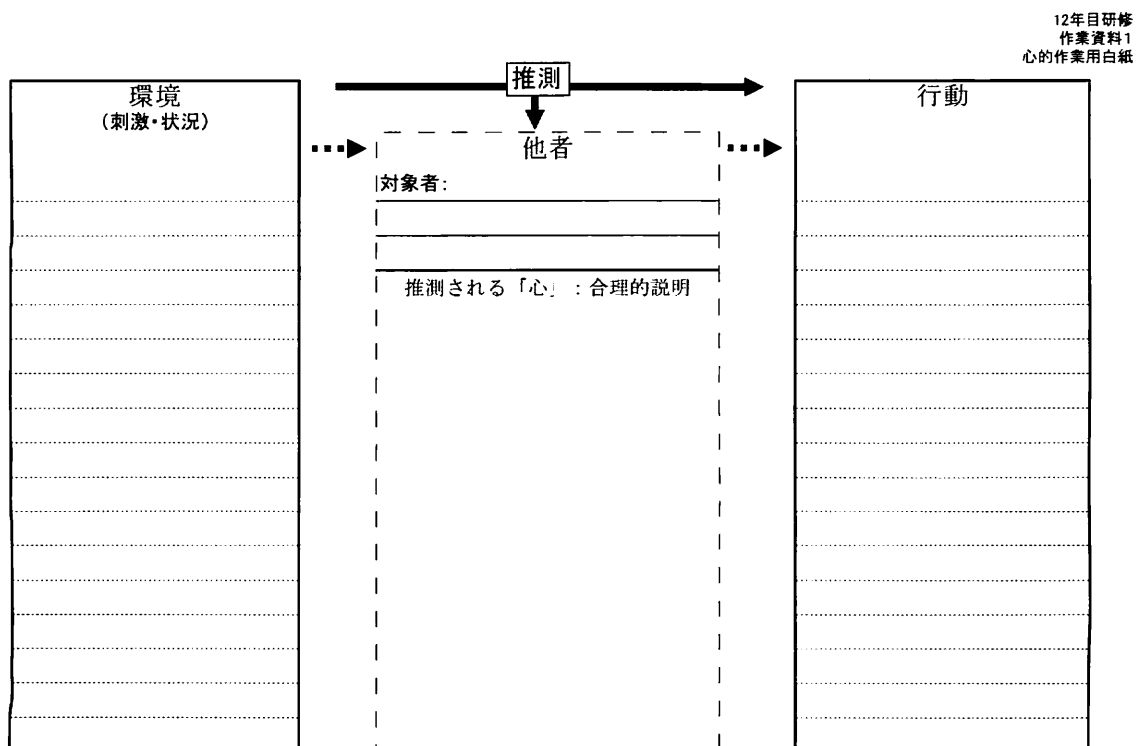
図ることを目標としました。

その後、「他者の心」を理解するとは：理解するには」について講義をしました。これは、各研修者が職場に戻って、事例を検討するための視点と客観的材料集めの方法を指導するためです。内容は、

- ・誰も、他者の「心」を直接（客観的に）観察することはできないこと
- ・それでも、他者の「心」を知りたいと思うこと
- ・日ごろ「心」を知ろうとして私たちが材料にしているもの：「刺激」と「行動」
これが「心」を考える客観的材料になる。
- ・相手の「心」は、「刺激」と「行動」から主観的に推測された結果であること
推測不能のこともあり、それは「理解できない」「なぜ」という思いを作り出す。
「相手の心」は「私の中」に出来上がる。
- ・同じ「刺激」と「行動」を材料にしても、推測しようとする人によって推測内容が異なることもあること
誰かと話をしてみて初めて気がつく・・・多くの人と相談しよう
- ・「刺激」と「行動」の客観的観察と記録内容に、「観察者の思い」が入り易いこと
- ・それを客観的事実と思い違いをし易いこと

これらの講義内容を踏まえて、研修生に、職場において課題となる事例の客観的観察を求めました。そのために利用されたのが、資料1でした。

資料1 他者の「心」を理解するためのチャート



最初に、資料1の真ん中の欄に対象者を記入します。ただし、下部の「推測される「心」」欄への記入はしないように、と記録の範囲を制限しました。その上で、「環境(刺激・状況)」欄と「行動」欄の観察記録を作成することを求めました。そのときに注意すべきことは、記録内容に「思い」が入らないようにすることです。

たとえば、対象児A君は日ごろ誰にということなく手を上げるので、どう対処したものかと気になっていたとします。このA君の気になる行動が出現するときの「環境・状況」と「行動」が次のように記録されることが良くあります。環境欄に「B君がなにげなくA君に話しかけました。」(A君にとっての環境・刺激・状況)、行動欄に「いらいらしてB君のことをぶちました。」しかしながら、この記録のうち、環境欄の「なにげなく」、行動欄の「いらいらして」は思いです。本当にそのような心の持ちようであったかどうかはわかりません。日ごろ「心」を推測しやすい(あまり問題を感じない)B君の行動は好意的に、日ごろなかなか理解できず、問題行動と評価していたA君の行動を、それが解釈しやすいように評価した結果が、それらの言葉なのです。

なお、これらの内容に加えて、これらの記録を行うときには匿名性等の倫理的配慮を十分に行うように、注意を促しました。

第2回から第4回の研修内容：

各研修生が、資料1にしたがってそれぞれの職場で対象児の記録を作成し、それをメールの添付ファイルで提出してもらいました。大学から遠距離にある勤務校の研修生については、主にメールのやり取りで、大学に来るのにあまり負担のならない研修生には、大学に直接来てもらって、それらの資料について検討しました。最初の指導は、「環境」欄と「行動」欄しか書き込まれていなかったので、そこの分析を行いました。その分析の中心は、記述内容が事実か、思いかという点です。そういう議論をしながら、研究生にはとにかく事実と思いがちな「思い」を事実の欄から剥ぎ取ることが中心になりました。これは「事実」を記述することがどういうことかに気づくと同時に、思いによって子どもを評価していないかということを意識化することにもなります。

それ以降のやり取りで、「環境」と「行動」の事実をさらに追加して収集し、記録した内容を検討すると同時に、その二つの事実から推測される「心」を解釈しました。ここでも、記録者のみが解釈すると独りよがりの解釈ができてしまいます。そこで、解釈された内容(資料真ん中下段)に対して、他の可能な解釈が成り立たないかを検討しました。解釈が独りよがりにならないためには、収集した事実を共有しながら、多くの人と議論することです。実際の教育実践の場であれば、同僚の教員、指導的立場にある教員、可能であれば保護者などが、その対象として考えられます。そのような議論の進行で大事なことは、一人一人が同じ権利を持ち、発言に同じ責任を持って議論することができることです。目的は、あくまで本当の姿は何だろうと考えることです。大学のゼミであればゼミ生みんな議論するのですが、今回の研修では途中で全員が集まって議論するというのは無理がありました。もともとそのように計画されていなかったので。

そこで今回の研修では、個々の研修生と指導教員との議論という形で解釈の仕方について考えました。その資料として渡した発達心理学において得られてきた成果に基づき、理論の有効性についても指導したつもりです。

この間に、研修生が大学に来て私と材料を基に議論した人が3人いて、平均2回訪ねてくれ

ました。研修生の中には、これらの分析に基づいて対象児の理解、指導にあたった人もいますし、対象児への周りの思い込み（先入観、偏見）に気がつき、その対応を考えた人もいます。どちらにしる、本研修の目的は、「事実」と「思い」を分離することでしたので、おおむねこの目的は達成できたのではないかと考えています。

第5回の研修内容：

最後に、研修生全員の大学研修の成果を発表し、内容の議論をしました。うれしかったことは、対象児が中学校と小学校、学年も様々とバリエーションも大きかったにもかかわらず、客観的な事実に基づくことの大切さを述べてくれたことです。とかく、思いに気がつかず、思いを事実と違って子どもに対応していた自分に気がついたことも、大変大事な気づきでした。また、各自が持っている課題の説明に他の研修生から出てくる意見が大いに参考になっていたと同時に、他の研修生の事例、その取り組み、理解の仕方もまた大いに参考になったという意見が、全員から聞かれました。

総括

本研修の目的が当初のものと変更になりましたが、10年経験者研修としての位置づけでもある12年目研修の目的の一つが、教育実践という職場に10年勤務することによって失念しかけた子どもへの本来の対応を、もう一度見直すということであれば、その役に少しは立てたのではないかと考えています。また、大学研修日の最後に、全員で事例を紹介し、全員で議論することにより、自分が気がつかなかったこと（気がつかない視点、気がつかない対応法、気がつかない独りよがりなど）を、他の人の意見が気がつかせてくれたことに代表されるように、他者の意見を聞くことの重要性を認識できたとすれば、はなはだ幸いです。

最後に、何人かが感想を寄せてくれました。それをいくつか紹介して、論を閉じます。（いただいた感想については、個人が特定されないように、抜粋と修正を加えました。）

研修生からの感想

< N.さん >（一部抜粋修正）

今回、一番役に立ったことは、『事実を書き出して心を考察する』方法でした。

普段はなんとなく問題に思っていることや自分の感じたこと、人から聞いたことなどが入り交じって、事実だけを取り出すという当たり前のことが今までは出来ていなかったように思います。ずっと記録してまとめていると、Aが以前とは同じような状況の中で違う反応をし始めたことが分かり、以前と比べてどこが変化したのか、どこが成長したのかがはっきり見えてきました。また、Aの出来事を週案簿にただ書き連ねていたときは、Aが授業を嫌がる様子を、自分の授業の至らなさが原因だと思って自己反省するばかりでしたが、Aの立場になって考えたとき、初めてAは本当は自分もみんなと同じようにやれたらいいのにやれない自分、本当はやりたかったのに不安が強くてできなかった自分に対しいらだちを感じているのではないかと考えることが出来ました。この研修を通して、自分の課題であった、『児童の心を推測できるようにする』ことは、完全ではありませんが、なんとなくこれからも使っていけそうだと思います。

< M. さん > (一部抜粋修正)

7月、最初の研修で「児童・生徒理解をするための質問事項をつくり、それを分析する」ということを大井先生がお話された時、正直驚きました。とても難し過ぎて、私にできるのかなあ、と不安になりました。しかし、私たちの現場の様子を一生懸命聞いてくださり、「今、私たちの目の前にある問題について、児童一人に焦点を当てて考える。」という内容にしてくださり、とてもありがたかったです。

私は、学級の児童であるAに焦点を当てました。Aの「環境(刺激・状況)」の事実を書き出し、その環境下での「行動」も書き出す、そして、そこからAの心を推測する、という方法は、とてもためになりました。「一人をじっくりと見て、分析していく」ということを行う機会は、これまであまりなかったので、これを機会に深く考えてみました。チャートや文章にしていくと、いろいろなものが見えてきました。Aの性格や人柄、課題点、家庭の様子、周りの児童との関わりの様子などです。そして、書き進んでいくと、A自身は後退しているわけではなく、4月から成長しているということも改めて実感しました。大井先生の講座を受けることにより、今まで自分が行ってきた指導、これから行っていくべきこと、A自身への働きかけ、学級への働きかけなど、具体的に見えてきました。自分自身の頭の中も整頓できました。

また、研修の最終日に、他の先生方の実践や成果を聞いたこともよかったです。どの先生も深く考えてみえ、その姿勢を見習いたいと思いました。そして、同じ悩みというか、課題に立ち向かってみえたので、励みになり、勇気づけられました。

< M. さん > (一部抜粋修正)

さて、ご指導いただいてから1週間の間、Yの姿を客観的に見てみました。以前よりも彼は落ち着いており、運動会も精一杯がんばる姿が見られました。練習ではいい加減に演技をしてよく叱られていたYでしたが、本番では一生懸命に踊ることができました。そのがんばりをほめると、Yは照れくさそうに喜んでいました。2年生くらいだと、まだまだ個人として確立しておらず、心理的にも理解しきれないところがあります。あまり深刻にならずに、ゆったりかまえて彼に接していこうと思いました。

もうひとつ、Yに関して気づいたことがありました。それは、一定の友達ができたとということです。転校生の男子と仲良くなり、今までYがいじめていた体の小さい男子とも一緒になって遊んでいるのです。Yが自分から嬉しそうに声をかけ、あとの2人がその誘いに元気に応えていました。Yの母親とも最近話をしたところ、とても落ち着いた様子でした。彼の心の成長が、少しずつ期待できそうです。

今回の大学研修では、たくさんの刺激とアドバイスを頂きました。心理面からのアプローチは、今まで私が考えもしなかった概念でした。他の先生方の真摯な姿勢も、たいへんよい刺激となりました。